

【氏名】西村 雄志

【所属大学院】(助成決定時)

大阪大学大学院 経済学研究科 博士後期課程経済理論専攻

【研究題目】

基軸通貨形成に関する研究 — 20世紀初頭のアジアの場合を中心に —

【研究の目的】

本研究の主たる目的は、20世紀初頭のアジアにおける国際金本位制の成立とそれに伴うポンドの基軸通貨性の確立の過程を明らかにすることにあつた。英領インドと海峡植民地に関しては既に論文のかたちで明らかにしている。そのなかでは、植民地内部に流通する貨幣の種類にイギリスの主たる関心があるのではなく、現地の通貨秩序をどのようにして効率的にポンド体制の枠組みのなかに包摂させるのが最重要の政策課題であつたと論じた。つまり、現地通貨をポンドと固定レートでリンクさせることで、現地で流通する貨幣を事実上ポンドの価値を代替する通貨とし、同時にその形態を現地経済が最も選好するものにして、植民地の広い範囲にポンド価値を浸透させようとしたのである。この仕組みが、イギリスのアジアにおける金融サービス利害を強化するうえで、大きな役割を担つたと論じた。

しかし、20世紀初頭のアジアにおける通商・金融のネットワークをしてみる時、海峡植民地(主にシンガポール)とともに香港が重要な役割を担っていた。第二次世界大戦以降も、ブレトン=ウッズ体制下でドル体制とポンド体制の狭間で大きな役割を担っていたことは知られている。しかし、香港は1935年まで銀本位制を維持していた。つまり、割譲後の短い期間を除いて、金本位になった時期はないのである。にも関わらず、香港は国際金本位制下の20世紀初頭のアジアで財貨や移民の重要な集散港として機能していた。ではどのようにして銀本位制の香港が国際金本位制の下でその地位を確保できたのか。そこからアジアにおける基軸通貨の成立が、金とリンクしていたからという単純な図式では描き切れない、アジア独自の基軸通貨としてのポンドの役割が見えてくると考える。

【研究の内容・方法】

研究の方法としては、以前にロンドンで収集してきた英国国立公文書館所蔵の植民地省の史料をベースにしつつ、英国議会文書と戦前の横浜正金銀行、台湾銀行、三井物産等々の調査報告書を用いて概要把握に努めた。

香港に関しては、貿易統計が1920年代初めまで整備されておらず、この時期には香港独自の統計はまだなかった。そのなかで輸出入額が把握できる物産は税が課されていたアヘン等数品目しかなく、本研究で必要となつた金銀の正確な移動額は把握できなかった。そのため、この時期に金銀の主要な輸出入国を6カ国挙げ、それらの国々の貿易統計から香

港の輸出入額の推計を試みた。そのため数値自体は正確性に欠ける点があるが、統計がない以上、この数値は当時の香港の金銀貿易の状況を考える上で有益な示唆を含むものと言ってよい。

それ以外に、香港の場合、銀行券の役割が大変大きかった。その点、当時の香港で中央銀行の様な役割を担っていた香港上海銀行の一次史料も用いるべきであった。しかしながら、本研究期間では訪問する機会に恵まれず、これらの史料を用いて検討することは別稿に譲りたい。そのため横浜正金銀行や台湾銀行が香港で取引するなかで、通貨制度あるいは取引に関する様々な報告書を、本社に送付していたので、そこに記載されている数値等を参照して、上記の統計と対比させるかたちで議論を構築していった。

香港で流通する紙幣は、英領インドや海峡植民地の場合と異なり、政府紙幣ではなく、銀行券であったことは、どのような理由があったのか。また銀行券は、銀貨(メキシコドル等の香港政庁によって認められた法貨)の持参人一覧払いであったが、市中では銀貨と銀行券が等価交換されることはなく、本位貨幣である銀貨が割り引かれていた状況はどのように考えればよいのか。それらは銀行券を発行していた香港上海銀行などより、市中で取引に対応していた横浜正金銀行や三井物産の方が客観的に見ていたのではと考え、それら史料を用いていった。

相対的に香港は財貨や移民の集散地としての機能が通貨制度を規定した側面が強い。ゆえに本稿では銀行の一次史料で十分ではない点があるものの、貿易史の観点から検討することに的を絞った。

#### 【結論・考察】

結論としては、香港が銀本位制を維持した理由は、後背地にあたる中国大陸が銀本位制を維持したことが最も大きかった。しかし香港はイギリスの植民地であった。狭い国土ゆえに宗主国の行政権力が金為替本位制への移行を強制すれば、可能であったかもしれない。しかしそのような選択をしなかったのはなぜか。それは、香港が宗主国のイギリスあるいは英領インド等に追随して金を本位貨幣として選択すれば、中国貿易の集散地としての機能を上海に奪われると言う危惧があったためと指摘されている。つまり、香港は自らのアジア間貿易における地位を確保するために、あえて銀本位制を維持したのである。

しかし、香港の周辺各国は短期間で金為替本位制(あるいはそれに類する通貨制度)に移行し、欧米諸国でも銀は本位貨幣としての中心的役割を喪失させていくなかで、香港は銀本位制をどのように維持させたのか。そこで重要な役割を果たしたのが銀行券であった。

銀行券は、制度的には銀貨の兌換紙幣として位置づけられているものの、実際の市中での取引では銀行券は銀貨より強く選好されていた。それは銀行券が銀貨の価値で裏打ちされているから流通しているのではないことを意味していた。それはむしろ発券銀行の信用力に価値の源泉を見出していたからではなかろうか。発券銀行のロンドン金融市場での信用が銀行券の価値を規定していたと考えれば、中国以外の国々との取引の場合、銀行券の

需要が喚起され、逆に中国大陸との取引の場合、銀貨の需要が喚起された、と想像することができる。そのように見れば、香港の銀本位制は、銀行制度を組み込んだかたちで、国際金本位制と銀本位制の両方の経済圏との関係を維持した工夫された通貨制度であったといえる。そして、20世紀初頭から両大戦間期にかけて、香港において銀行の役割が強まったことによって、アジア間貿易における為替や送金のネットワークで香港の役割が高まり、第二次世界大戦後の金融サービス面におけるアジア経済での確固たる地位につながったと考えることもできるのではないか。

香港から見た場合、20世紀初頭にアジアにおける基軸通貨性を確立したポンドは、決して金の価値に裏打ちされたからその地位を確立できたのではなかった。むしろ銀や銅銭を介して長い年月の間に構築された伝統的通貨秩序を包摂することによってその地位を築くことができたのである。ポンドは、アジア間の経済関係が緊密さを強めるなかで、現地商人たちに最も利便性の高い通貨として選択され、その判断がイギリスの政策意図にも合致したという幸運により、アジアにおける基軸通貨としての地位を得ることができたのである。